

【一般社団法人新潟市青色申告会長賞】

「命を守る」

学校法人北越高等学校

北越高等学校

三年 猪爪 優稀奈

私はこれまで、税金というものを日常生活の中で強く意識したことはなかった。買い物をするときに消費税を払っていることは知っていたが、そのお金がどのように使われているのか、なぜ必要なのかまでは深く考えたことがなかった。そんな私が税金の役割について考えるきっかけとなったのは、高校の英語の授業で行われた「救急車は有料にすべきか」というディベートである。

その授業では、クラスが有料派と無料派に分かれて意見を戦わせた。有料派は「重症の人への救急が速くなる」と主張し、無料派は「貧富の格差が生じ、必要なときに呼べなくなる人が出る危険がある」と訴えた。議論を通じて、私は両者の主張に一理あると感じながらも、日本において誰もが安心して救急車を呼べる仕組みの重要性を強く実感した。

さらに調べてみると、海外の国々では救急車の利用に高額な費用がかかり、ためらう人がいるという実態があると知った。それに対して日本では、救急車の運営費や人件費を税金でまかなっているため、誰もが安心して利用できる。私はこの事実を知り、税金は「命を守る仕組み」を支える大切なお金であると理解した。

この経験を通じて、私は税金が生活のあらゆる場面に関わっていることに気づいた。救急車だけでなく、学校で使う教科書や

図書館、道路や公園、さらには災害時の支援など、私たちが当たり前のように利用しているものや受けているサービスの多くは税金によって成り立っている。税金は個人のためだけでなく、社会全体の安心や安全を守るために欠かせない存在である。

また、税金は「分かち合いの仕組み」であるとも考える。自分が納めた税金は必ずしも自分に直接返ってくるわけではない。しかし、それは困っている誰かを助け、やがては自分や家族が支えられる側になるかもしれない。救急車の例でいえば、今日必要とするのは他の誰かかもしれないが、明日は自分が助けられる側になるかもしれない。税金を納めることは社会の一員としての責任であり、同時に安心して暮らすための「お守り」のような役割を果たしているのだ。

今回のディベートを通じて、私は税金を「取られるお金」ではなく「みんなが社会を支えるお金」として捉えるようになった。将来働いて税金を納める立場になったとき、今回学んだことを忘れず、自分の負担が誰かの安心につながっていることを誇りに感じたい。そして税金を通じて社会全体が支え合い、誰もが安心して暮らせる未来をつくっていききたいと考える。